

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎



ロシア・
サンクトペテルブルク



2000年、ドイツでクララ・シューマン国際ピアノコンクールが終わった数日後、音楽祭に出演するため、ポーランドを経由し、小さなオペラ機でロシア・サンクトペテルブルクに降りた。日本から最も近い国でありながら、ソ連時代の印象が暗く、謎めいた未知の国に感じられた。

到着早々、不安は的中した。ビザを取得していたにもかかわらず、米ドルで100ドルを要求された。大学で学んだロシア語はまったく使い物にならず、言われるがまま支払うほかなかった。予約したタクシーも往復の代金を払わないと乗せないとわれ、荷物分も同料金に加算された。

宿泊したホテルは四つ星のはずだが、蛇口をひねると緑色の水しか出てこない。夜食用に熱湯を持ってきてもらおうと20ドルを求められた。踏んだり蹴ったりだが、ソ連崩壊から10年もたっていない頃の

帝政時代の栄華をしのぶ



出来事なので、生きるためなら何でもありだったのだろう。

ホテルには午後11時すぎに着いたが、なかなか日が暮れない。海に落ちそうなところで太陽が踏みとどまっている。気持ちが高ぶって寝られなかったため、人通りのない市街地に出てみると、皇帝や貴族の宮殿が立ち並び水路が流れ

る優雅な街並みが、薄明かりで幻想的に染まっていた。

運河では小舟のきしむ音だけが響き、チャイコフスキーが6月に寄せて舟歌を書いたことを思い出した。玉ねぎ頭が特徴的なロシアの教会は、足元から震わせるような、重い鐘の音を鳴らす。かつて師が言っていた「ロシアの鐘は口

シアを響かせる」という言葉がよみがえる。鐘の音が鳴り響くラフマニノフのピアノ曲からは、亡命先、アメリカでの彼の祖国愛や苦悩が伝わってくる。

音楽祭の会場はエルミタージュ美術館から程近く、リハーサルの合間はこの「隠れ家」が絶好の憩いの場となった。長らくロシア帝

国の首都だったサンクトペテルブルクの栄華を象徴する建物で、その美術品は歴史の光も闇をも物語る。印象派の作品をまとめた部屋は当時あまり整備されておらず、床に無造作に置かれているものもあった。窓も開けっぱなしで、ひどくひび割れている作品も散見されたが、その一つがゴーギャンだった。「大エルミタージュ展」が来日した時、鑑賞しながら複雑な思いに駆られた。

サンクトペテルブルクはかつてのレーニングラード。ソ連崩壊後、ロシア帝国時代の名称「聖なるペテロの街」を取り戻した。音楽祭ではこの地を代表するプロコフィエフのピアノソナタを演奏した。

「戦争ソナタ」の異名を持つ第7番のソナタは、第2次世界大戦でドイツ軍を撃破した時の様子を描写しており、プロコフィエフが来日時に接した「越後獅子」が最終楽章で用いられている。

ビデオカメラは会場で盗まれ、その時の演奏は幻となって消えたが、私のサンクトペテルブルク滞在は、ゴーゴリの小説のような数日間だった。白夜はフィンランド湾の沼地に建造された人工都市を深い霧のように覆う。21年前の幻を追いに、ロシアを再訪したい気持ちは大きい。

①サンクトペテルブルクで開かれた夏の国際音楽祭「白夜祭」でのコンサート ②宮殿広場と冬宮殿(エルミタージュ美術館) ③いずれも2000年、ロシア(赤松林太郎さん提供)

◇第2月曜に掲載します。



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

